

他力念仏 無礙の一道

勸修寺村の道徳、明応二年正月一日に御前へまゐりたるに、蓮如上人仰せられ候ふ。道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし。自力の念仏といふは、念仏おほく申して仏にまゐらせ、この申したる功徳にて仏のたすけたまはんとするやうにおもつてとなふるなり。他力といふは、弥陀をたのお一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり。そののち念仏申すは、御たすけありたるありがたさと思ふところをよるこびて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申すばかりなり。されば他力とは他のちからといふところなり。この一念、臨終までとほりて往生するなりと仰せられ候ふなり。

〔蓮如上人御一代記聞書 一〕
 〈現代語訳〉 勸修寺村の道徳が、明応二年の元日、蓮如上人のもとへ新年のご挨拶にうかがったところ、上人は、「道徳は今年でいくつになったのか。道徳よ、念仏申しなさい。念仏といつても自力と他力とがある。自力の念仏というのは、念仏を数多く称えて仏に差し上げ、その称えた功徳によって仏が救ってくださるように思つて称えるのである。他力というのは、弥陀におまかせする信心がおこるそのとき、ただちにお救いいただくのであり、その上で申す他力の念仏は、お救いいただいたことを、ありがたいことだ、ありがたいことだと喜んで、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申すばかりなのである。このようなわけで、他力というのは他の力、如来の本願のはたらきという意味である。この信心は臨終まで続き、浄土に往生するのである」と仰せになりました。

新年あけましておめでとうございます。旧年中はお世話になりました。今年もホームページ共々よろしく願います。

新年を迎えて午前零時過ぎから本堂で元旦会のおつとめをします。おつとめの後、初詣の参詣者の皆さんへ『拝読浄土真宗のみ教え』という冊子の中「お正月」という法文を拜読してお取次ぎします。

その法文の中に
 道徳はいくつになるぞ
 道徳念仏申さるべし
 という文章が出てきます。

これは蓮如上人のお言葉を収録した『蓮如上人御一代記聞書 一』(上記)にあるご文です。寺報の中に「法語の世界」というコーナーを設けていますが、上記は平成十四年一月発行の第十一号に掲載していました。すっかり私は忘れていました。

上記を見ていただければわかると思いますが、右のご文

の後に「自力の念仏といふは(中略)、他力といふは(後略)」と念仏について自力と他力について詳しく説かれています。

「自力の念仏」とは、念仏をたくさん称え、その功徳によつて救つてもらおうという思いで称える念仏と示されています。

一方「他力の念仏」とは、阿弥陀さまのお喚び声(まかせよ)南無われに(阿弥陀)を疑いなく信じ、必ず救ってくださる阿弥陀さまに全てをおまかせし、その上でその救いをよることで称える念仏であると示されています。

「救い」ということについて何の力も持たぬ私、そんな私を決してお見捨てになることなく、絶えずはたらき続けてくださる阿弥陀さまのお慈悲・功徳をよろこび、二〇二〇(令和二)年も他力の念仏申させていただく「念仏無礙の一道」を歩みましょう。

法語の世界

《原文》

おなじく御病中に仰せられ候ふ。いまわがいふことは金言なり。かまへてかまへて、よく意得よと仰せられ候ふ。また御詠歌のごと、三十一字につづくることにてこそあれ。これは法門にてあるぞと仰せられ候ふと云々。

〔蓮如上人御一代記聞書 二百四十四〕

《現代語訳》

同じく病床にあつた蓮如上人が、「今、わたしがいうことは、仏のまこと言葉である。しつかりと聞いてよく心得なさい」と仰せになりました。また、ご自身がお詠みになった和歌についても、「三十一文字の歌をつくつたからといって、風雅の思いを詠んだのではない。すべてみ教えにほかならないのである」と仰せになりました。

《現代語訳》

金言………仏の口から出た言葉。まこと言葉。かまへて………必ず。

光 寿 無 量

新年あけまして おめでとうございます

本年も どうぞよろしく願います

二〇二〇(令和二)年 正月

金光寺寺内一同
 金光寺役員一同

法事について

恩講の年忌のご案内をお届けしました。新年を迎えてご法事のご連絡をいただきます。その際よくわかるのが、祥月命日より前なら早くても法事をつとめていいですよ。お答えするのは、祥月命日より後になってもいいですよ。法事をつとめないはいけません。後になっても心配されなくていいです。また、祥月命日が同じ日になっていくケースが本年は多数あります。日程を決められた際は早目に連絡ください。連絡を立ってお知らせしてください。